

連 載

## セカンドオピニオン

石垣 武男

私が医師になった頃は目の前の患者や家族に病状を説明し治療法について選択枝も含めて提示し、さらに当方が推奨する治療法についての具体的な内容を解説し了解を得たものである。ほとんどは「お任せします」方式であった。当方が進める治療法以外を希望した場合は然るべき医師や医療機関を紹介するといった方法もとった。

専門領域の治療法については懇切丁寧に説明するが、他の治療法については専門外でもあることから月並みの説明程度に終わるのが通常である。実際、高度化した現在の専門外の治療法について、自らの専門領域の治療法の解説と同等な内容を患者に伝えるのは不可能かもしれない。したがって当然説明の内容にバイアスがかかり、自らの専門領域について実際以上に美化して説明するケースも出てくる。自分の専門領域について説明に力が入るのは当たり前のことではある。

たまたま受診した病院でたまたま診察してくれた医師から唐突に重大な宣告をされて、治療法は私に任せなさいと言われても躊躇するのが普通である。ましてや最近のようにあからさまに「貴方は癌でこのままでは1年と持たない」などと突然言われたら、人間誰しも頭が真っ白になりそれ以後の医師の説明の内容など頭に残ってないのが普通であろう。私にまかせなさい方式ならまだしも「貴方が選びなさい」という場合も最近は増えている。治療法を各種説明して患者に選択させるのである。責任逃れ医療の最たるものである。権利意識の暴走やネット上の病気についての情報氾濫などで、特定の疾患についてまるで理解してしまったかに勘違いする患者が増えてきたためかもしれない。有名な病院だからと言って安心するのも問題がある。ネット上で歯の浮くような宣伝をしている病院も多い。病院が病気を治してくれるわけではなく、個々の医師の力量や誠意、看護師やコ・メディカルの質が治療を左右することも事実である。さりとて設備の整わない病院では腕が振るえないこともある。

目の前の医師の診断や治療法が適切かどうか判断の材料にするためには、患者が別の医師の「第2の意見」を求めることが流行りだした。米国で30年以上前から活発になった。日本では1990年代後半からこういった相談に応じる診療科や病院が出始め、今では有料の「セカンドオピニオン外来」を設ける病院も増えている。もちろん主治医の紹介状や検査データを取り揃えて受けるのが原則である。セカンドオピニオンを受けるのはほとんどがん治療に関してである。最初に進められた治療法の内容に関してや、他の治療法の内容、自分の選択できる治療法を決めるのに役立つし、気持ちの整理にもつながる方法と思われる。

しかしいざセカンドオピニオンを希望してもどこへ受診したらいいのかわからない場合も多いと思われる。これもまたネットで検索するしか手立てがないかもしれない。セカンドオピニオンで会った医師が本当に信頼できるのかどうかもまったく分からない。最初に診た医師の方がはるかに優れている場合もあるであろう。

私の勤務する名古屋城北放射線科クリニックでも粒子線相談外来を開設した。主眼は重粒子線治療施設での治療を円滑に進めるための相談外来である。重粒子線治療が受けられる施設は全国で現在4ヶ所ある。初診病院で重粒子線治療が選択枝の一つとなった場合に当クリニックを受診してもらえば、当方の専門医が資料をもとに判断ししかるべき施設への紹介を行うものである。紹介といっても単に紹介状を書くのではなく実際の治療の是非を判断し、受診日や場合によっては治療開始の日までを設定して対応しようとするものである。重粒子線がいいのか陽子線でもいいのか、または他の治療法の方がいいのかという相談にももちろん対応する。もっと基本的なケース、例えば、がんと言われたがどんな治療法が最適なのかといった相談ももちろん対応している。放射線科という診療科は一般の人は理解されていないであろうが、がんのみならず病氣全体について幅広い知識を有する専門医師集団であるのでこういった相談にはうってつけの診療科なのである。

<http://www.a-m-foundation.com/index.html>

(名古屋城北放射線科クリニック院長)